



徳永 幸雄
海軍一等飛行兵曹
昭和20年3月21日
鹿屋基地から出撃。享年23歳



▲昭和20年3月21日の出撃の様子
© 横文林堂 © 榎本哲



▲出撃を前に笑顔で写真に写る幸雄さん

と連絡がありました。家族全員久しぶりに兄が帰ってくるのを楽しみにしていたのを覚えてます。

兄は家に一泊して、翌朝鹿屋基地に帰りました。その時母に『家に帰るのは今日が最後です。鹿屋基地を飛び立つたら家の上空で3回転回るのでそれが自分だと思ってる』と話しました。

兄は約束どおり家の上で旋回し、母はタオルを竿に巻きつけて飛行機に向けて振ったそうです。

兄は出撃の日に革のトランクを置いていきました。後で開けてみると中には、特攻隊員がつけるマフラーやアルバム、家族に宛てた遺書や通帳などが入っていました。しかしあつ時、盗難に遭い、手元には2枚の写真しか残りませんでした。」

幸雄さんが出撃してしばらくして

兄は生まれ育った鹿屋から 23歳で出撃しました

稲村ツヤ子さん(79歳)



から、ツヤ子さんら家族は鹿児島市に遺骨を受け取りにいきます。

「帰宅後骨つぼを開けてみたところ中には貝殻がいくつか入っているだけでした。それを見て家族全員で泣きました。普段は気丈な母が泣いたのを見たのはそれが最後でした」

今を生きる若者へ

戦後70年がたちますが、ツヤ子さんはいまだに戦争のことを忘れられないと言います。

「兄は23歳で亡くなり、青春時代の全てを失いました。それと比べれば私たちはなんと恵まれているのだ

ろうと思います。

私自身も戦争で怖い思いをしました。幼い日に経験した空襲の恐怖は今でも忘れることはできません。終戦前には頻りに空襲があり、落ち着いて勉強することができませんでした。

今の若い人に伝えたいことは、この戦争を忘れてはいけないということです。そして今の平和な世の中を守っていつてほしいと思います」

鹿屋基地から出撃した特攻隊員の遺族が市内にいらつしやいます。

下堀町に住む稲村ツヤ子さん(79歳)の兄、徳永幸雄さんは、昭和20年3月21日に第一神風桜花特別攻撃隊・神雷部隊戦闘隊員として生まれ育った鹿屋から出撃し、23歳で戦死しました。ツヤ子さんが9歳のときでした。

幸雄さんは7人兄弟の長男として永野田町で生まれました。責任感が強く、真面目で勤勉な兄だったとツヤ子さんは振り返ります。

「兄は軍人だった母の兄弟の影響で幼いころから海軍に憧れていたようです。しかし長男ということもあり、両親は軍隊に入ることを猛反対していました。

兄が勉強をしていると父がよく『はよ寝らんか!』と叱っていたそうです。それでもどうしても海軍に入りたいかつた兄は、布団を被り、豆電球の明かりを頼りに勉強していたと母は話していました。」

最後の挨拶

猛勉強の結果、念願が叶い幸雄さんは10代後半で海軍に入隊します。そして各地の基地を経て特攻隊の隊員として鹿屋基地に配属されました。

「出撃を前にして、兄から家に帰る

神風特別攻撃隊

海軍の特別攻撃隊員の主な構成は学徒出陣の士官と海軍飛行予科練習生たちでした。

学徒出陣とは、昭和18年から兵力不足を補うため行われた、大学等に在籍する20歳以上の文科系などの学生を在学中途中で徴兵し出征させたことを言います。また海軍飛行予科練習生とは20歳未満で入隊した少年飛行兵のことです。

つまり特攻作戦は夢や希望に満ち溢れた20歳前後の若者たちが中心となって行われ、鹿屋基地からは908名、串良基地からは363名の特攻隊員たちが南方の空へ向けて飛び立ち、二度と帰ることはありませんでした。



串良基地から飛び立つ特攻機(阿部徹雄撮影/毎日新聞社提供)

少女が繋いだ 2週間の恋

特攻隊員の出撃地となった鹿屋には各地に隊員たちの宿泊所が設けられました。しかしそれだけでは足らず周辺の民家などに寝泊りする隊員たちも大勢いたようです。

西原1丁目の城之下テル子さん(82歳)は戦時中、上谷町にあつた民家に呼ばれて遊びに行つた時に、ある2人の特攻隊員と出会います。

その民家は大きな家で、5、6の部屋があり、隊員たちが日替わりで泊まりに来ていたそうです。城之下さんは当時のことをこう振り返ります。

「2人の名前は諸藤さんと佐久間さんと言いました。歳は20歳位で当時は2人が特攻隊員だとは夢にも思いませんでした。

2人はその家の蓄音機から流れる音楽に合わせて腕を振って軍歌を歌ったり、ハーモニカを吹いたりする屈託のない普通の若者でした。

ある時、当時通つていた西原小学校のオルガン室に遊びに行つたときに諸藤さんがいました。

私を見つけた諸藤さんは、オルガンを弾いている女性に手紙を渡してくれと頼んできました。その後何か2人のやりとりを仲介したと思います。

諸藤さんの最後の手紙は同僚の隊員さんが持つてきて、その時『諸藤は南方に転勤になり、これが最後だ』と言われました。

しかし何か月も経つてから、民家の人から2人は特攻隊員として飛び立つて戦死したと聞かされ涙が止まりませんでした。

戦後諸藤さんの最後の手紙を私に託した元隊員さんが『諸藤は2週間の恋をした』と話していたことを人づてに聞かされました。

男女が面と向かつて話すことが許されないそんな時代でした。」



▲諸藤さんと佐久間さんの名前が書かれた小塚公園の慰霊碑に手をかざす城之下テル子さん